

入選

姉の行動が教えてくれたこと

徳島県 徳島文理小学校 6年 近藤 麻友

「今日、ちいちゃん帰ってくるん遅いなあ。」

と、母が言った。時計を見ると9時を過ぎている。ふだんなら、姉は部活があっても8時には帰ってきている。確かに遅い。私は、

「電話かメールしてみたら。」

と言ったが、どうやら姉の携帯は充電切れで、つながらないらしい。母は心配顔で、仕事中の父や近所に住む祖父母に電話をかけ、行き先を知らないか、聞いていた。そこへ、

「ただいま。暑かったわ。」

と、頭から水をかぶったように汗びっしょりの姉が帰ってきた。私たちが心配していたことを知り、姉は連絡ができなかったことを謝った。それから、タオルで汗をふきながら帰りが遅くなった理由を話し始めた。

今夜、いつもと同じように駅から歩いて帰る途中、知らないおばあさんに声をかけられた。知り合いの家に行くために、教えられたバス停で下りたところ、そこからの道順がわからなくて困っていると。そこで、おばあさんの手書きのメモを見せてもらおうと、下りたバス停とは違うバス停の名前が書かれていた。おばあさんはこのあたりに来るのは初めてだそうで、よく似た名前のバス停と聞き間違えて下りたのだ。

目的のバス停までは二つ先。夜なのでバスの本数は少なく、次のバスを待つより歩いた方が早いと思った。だから、おばあさんが持っていた大きいおみやげの紙袋を代わりに持ち、住所の家までいっしょに歩いた。家から全く逆方向へ歩いて行ったので、帰りが遅くなった。と、なんでもないことのように穏やかに話した姉に、私はものすごく驚いた。私なら目的のバス停までの行き方を教えることしかしなかつたろう。外は暗いし、暑いし、疲れているのに、遠回りになる道をいっしょに歩くなんて絶対に考えなかつたと思う。

「困ったけん。暗いけん、一人だったら道わかりにくいし。おばあさん喜んどったよ。私もいい運動になったわ。やせたかな。」

と、^{すがすが}清々しい顔をした姉は冗談まで言って私たちを笑わせた。私は当たり前のことを当たり前にしただけだと思っている姉のことをすごくかっこいいと思った。きっと、私たちが遅くなった理由を聞かなかつたら、姉はなにも話さなかつたろう。本当の親切とはこんな風に相手のことを思い、自然と出るふつうの行動で、特別なことではないのかもしれないと思った。なぜなら、どんな人も一人では生きていけないからだ。

誰もが家族や社会の中で人とお互いに助け合って生きている。私も家族や友だちなど、毎日まわりの誰かのおかげで生きている。いつも誰かとつながっているという気持ちがあるから安心して生活できているのだと思う。だから、そんな人同士のつながりこそ大切にしなければいけないのだとわかつた。

私も明日から始めてみよう。姉のように笑顔で誰にでも自分からあいさつすることから。